

# 令和7年度 箕面国有林における植生等調査結果概要

## ■調査の概要

### 1. 目的

「箕面体験学習の森」整備事業エリアにおいて、令和6年度に創出したススキ草原の植生、シカ柵内の植物相、昆虫類相の調査を実施し、ススキ草原の種組成や種多様性、植物相および昆虫類相の経年変化などをとりまとめることを目的とする。

### 2. 調査項目

- ・植生調査
  - ①モニタリング調査 : 3箇所(1箇所あたり5m<sup>2</sup>、計25m<sup>2</sup>、多様性植生調査法により実施)
  - ②植物種リストの作成: シカ柵内2区域
  - ③絶滅危惧種の確認: エキスポ記念の森エリア
- ・昆虫相目録整備調査 : エキスポ記念の森エリア

## ■調査実施状況

- ・植生調査 : 令和7年7月10日、令和7年10月9日
- ・昆虫相目録整備調査: 令和7年7月6日、9月12日

※植生調査時に確認した昆虫類を補足的に記録

## ■調査結果—ススキ草原の植生調査—

### 1. 種組成

- ・各調査区における被度は60%~75%、平均67%であった。
- ・各調査区の優占種はススキ(平均27%)またはネザサ(平均28%)であった。
- ・出現種は、二次草原(ススキクラス)、林縁植物群落、先駆高木群落、夏緑広葉樹林、常緑広葉樹林を構成する種であった。
- ・ススキクラス構成種はススキ、ネザサの他オカトラノオとマルバハギのみ確認した。
- ・外来種は全体としては少なかった。

### 2. 種多様性(図1)

- ・出現種数合計は44種、5m<sup>2</sup>あたりの平均出現種数は21.0種であった。
- ・調査地点において、草本層平均被度67%に対して、ススキ、ネザサを含む多年草が占める被度が50%以上であった。
- ・外来種の被度は、すべての調査区で0.1%以下であった。
- ・多年草の出現種数よりも、つる植物、先駆種、夏緑樹が占める出現種数が多かった。

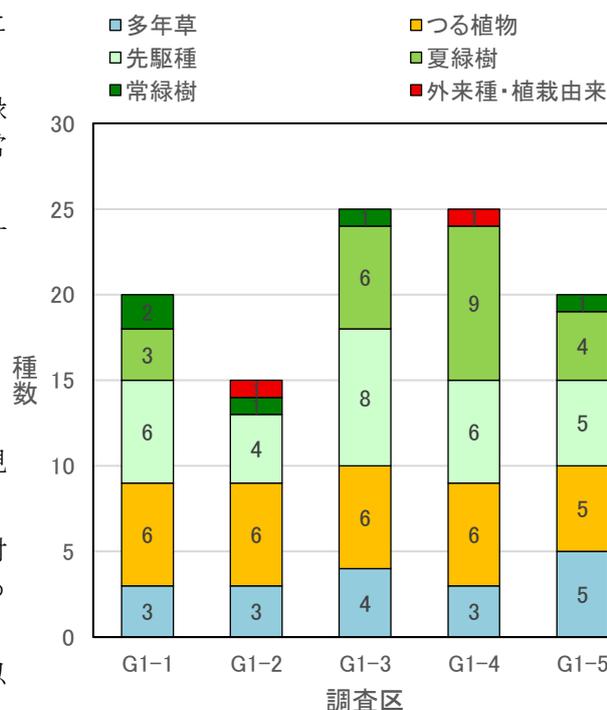


図1 各調査区における生活形別種数

## ■ 調査結果—植物相調査—

### 3. 植物相の経年変化 (図 2)

- ・令和 7 年度は 103 科 346 種の維管束植物を確認。
- ・平成 28～令和 7 年度調査の結果、合計 123 科 486 種の植物を確認。
- ・このうち、植栽由来もしくは植栽由来種が逸出したと考えられる種については 19 科 26 種。

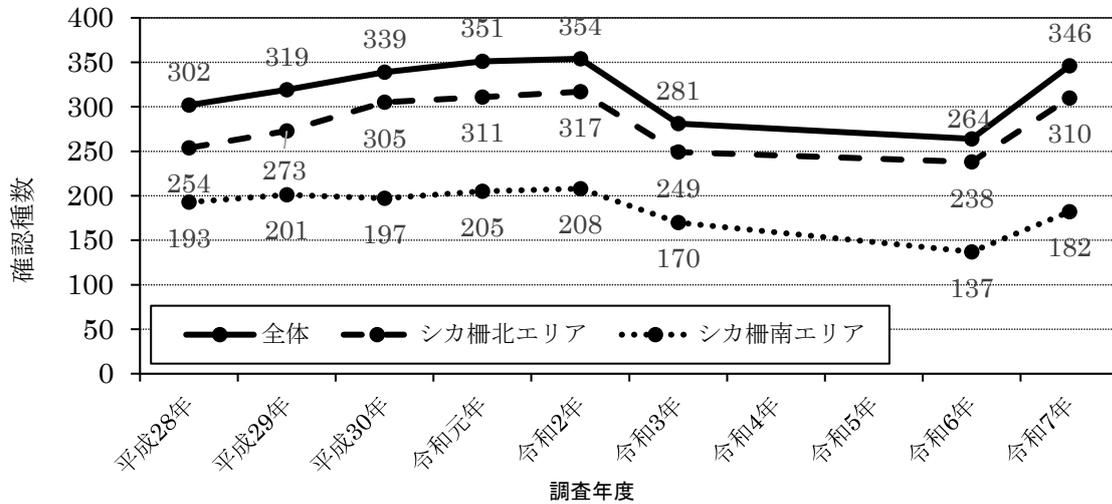


図 2 維管束植物確認種数の経年変化(平成 28～令和 7 年度)

### 4. 希少な植物

- ・絶滅危惧種 (自生と考えられるもも) として、以下の 3 種を確認。  
 マツバラシ (柵外) : 大阪府レッドリスト 2014 絶滅危惧 I 類  
 クモラン (柵外) : 大阪府レッドリスト 2014 絶滅危惧 I 類  
 キンラン : 大阪府レッドリスト 2014 絶滅危惧 II 類
- ・その他、絶滅危惧種の可能性があるオニノヤガラ属の一種を確認。
- ・レッドリスト掲載種以外で注目される種として、花が美しいエドヒガン、ササユリなどを確認。



写真 1 マツバラシ

(環境省・大阪府：絶滅危惧 I 類)



写真 2 キンラン (大阪府：絶滅危惧 II 類)

## ■ 現存植生図の修正

- ・ 令和6年度にススキ草原を創出したことから、現存植生図を一部修正。
- ・ ゾーニング図については、令和6年度にススキ草原創出を前提に変更済み。

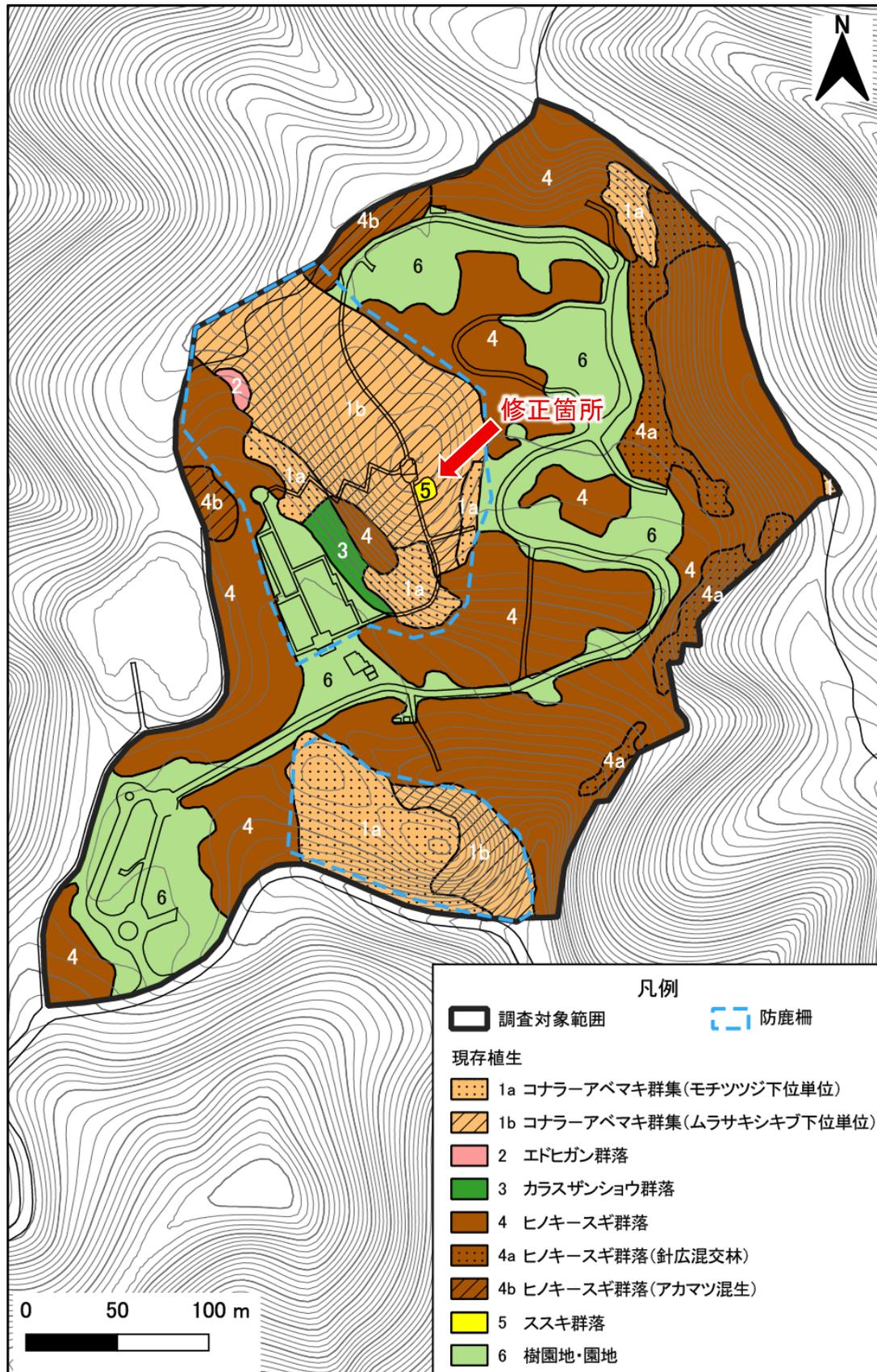


図 3 現存植生図(令和7年度版)

## ■ 調査結果—昆虫相目録整備調査—

### 1. 昆虫類の確認状況

- ・7月及び9月に調査を実施した結果、11目83科173種の昆虫類を確認。
- ・コウチュウ目、チョウ目、ハチ目の生息状況の概要は表1のとおり。
- ・絶滅危惧種として、大阪府レッドリスト2014で準絶滅危惧種に該当するホソミイトトンボ(写真3)、オオルリボシヤンマ(写真4)、ナツアカネ、アキアカネ、ミヤマアカネ(写真5)の5種、環境省レッドリスト2020で情報不足に該当するモンズメバチの1種、計6種を確認。
- ・外来種として、アトジロサシガメ(中国原産)を確認。
- ・外来生物法、生態系被害防止外来種リストに該当する種は確認できなかった。

表1 コウチュウ目、チョウ目、ハチ目の生息状況の概要

目名	生息状況の概要
コウチュウ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・シカの糞が多いことを反映して、今年度もセンチコガネ、オオセンチコガネを確認。</li> <li>・樹液のしみ出しているクヌギやコナラなどに、カナブン、ヨツボシケシキスイなどが集まっているのを確認。</li> <li>・クワガタ類は、ミヤマクワガタ、スジクワガタを確認。</li> <li>・キノコを摂食するキノコヒゲナガゾウムシやモンキゴミムシダマシを確認。</li> </ul>  <p>ヨツボシケシキスイ</p>
チョウ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・林縁部では、コムシジ本州以南亜種、キタキチョウ、ホシホウジャクなどを確認。</li> <li>・樹液を吸密するルリタテハやヒカゲチョウを確認。</li> <li>・幼虫がクヌギやコナラを食樹とするツマキシヤチホコやモンシロドクガを確認。</li> </ul>  <p>コムシジ本州以南亜種</p>
ハチ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・利用者に危険をおよぼす可能性のあるスズメバチ類(スズメバチ属)として、コガタスズメバチ、モンズメバチ、ヒメスズメバチ、オオスズメバチ、キイロスズメバチの5種を確認。</li> <li>・トアシナガバチ類については、キアシナガバチの1種を確認。</li> <li>・ミツクリヒゲナガハナバチ、ニホンミツバチなどのハナバチ類を確認。</li> </ul>



写真3 ホソミイトトンボ  
(大阪府:準絶滅危惧)



写真4 オオルリボシヤンマ  
(大阪府:準絶滅危惧)



写真5 ミヤマアカネ  
(大阪府:準絶滅危惧)



写真6 ルリタテハ



写真7 ツクリヒゲナガハナバチ



写真8 ホンドクロオオクチキムシ

## ■ 調査結果—昆虫相目録整備調査—

### 2. 昆虫類の経年変化 (図 5)

- ・平成 26 年度～令和 3 年度の調査の結果、14 目 114 科 371 種の昆虫類を確認。
- ・令和 3 年度は調査回数が 3 回であったこともあり、過去最高の 180 種を確認。

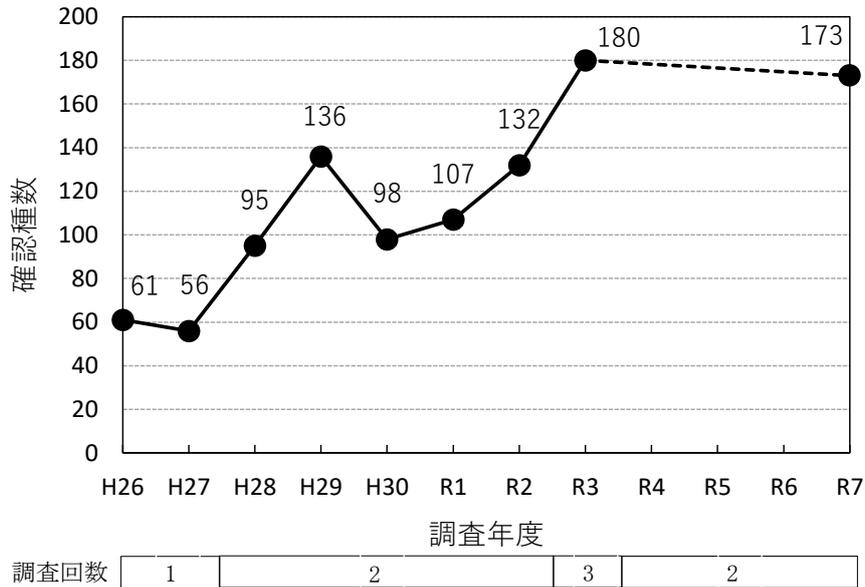


図 4 昆虫類確認種数の経年変化(平成 26～令和 7 年度)

### 3. その他の生物

- ・令和 7 年度の昆虫相目録整備調査及び植物相調査の際、両生類 5 種、は虫類 3 種、ほ乳類 1 種、計 9 種を確認。
- ・大阪府レッドリスト 2014 において絶滅危惧Ⅱ類に該当するニホンヒキガエルの幼体を 1 個体確認。
- ・外来生物法に基づく特定外来生物及び生態系被害防止外来種リストに掲載されているウシガエルを花の谷の池で確認。
- ・平成 26～令和 3 年度及び令和 7 年度に確認されたその他の動物は、種名が特定できないものも含めて、鳥類 2 種、両生類 6 種、は虫類 8 種、ほ乳類 7 種、計 23 種。



写真 9 ニホンヒキガエル  
(大阪府：絶滅危惧Ⅱ類)



写真 10 ウシガエル  
(特定外来生物)

## ■まとめ(今後の課題)

### 1. ススキ草原の育成

#### ◎種多様性の確保

- ・ススキ、ネザサが優占する景観が形成されたものの、構成種をみると、草原構成種(ススキクラス)はススキ、ネザサの他、オカトラノオ、マルバハギの計4種のみ。
- ・出現種は、つる植物(ノイバラクラス)、先駆種(アカメガシワークサギ群団)、樹林構成種(アカマツコナラクラス、ヤブツバキクラス)が大部分を占めている。
- ・種多様性の高いススキ草原へ育成するために、シカ柵内の他の場所で確認されているゲンノシヨウコ、ネコハギなどのススキクラスの種について、自然侵入を待つか、人為的な導入を行うかなどを検討することが望ましい。

#### ◎維持管理

- ・維持管理については、年1回の刈り払いと、適宜の除伐が令和6年度に提案されているが、この頻度では萌芽再生した樹木の枝葉や、つる植物の繁茂により、ススキの優占する景観を形成することが難しい可能性がある。
- ・部分的にネザサが優占している箇所では、将来的にネザサ群落となる可能性もある。
- ・そこで、ススキが定着するまでの1~2年間は、年1回の全面刈り払いに加え、年1~2回、切株から再生した萌芽枝の伐採や、つるの除去、必要に応じてネザサを選択的に刈り取ることが望ましい。

### 2. 今後の課題植物相における植栽種、植物由来種の精査

- ・「箕面体験学習の森」では、おもに花の谷に多数の植物が植栽されており、次回、シカ柵内の植物相調査時には、植栽種、植栽由来種の取り扱いを整理することが望まれる。

### 3. モニタリング調査間隔見直しの妥当性の検討

- ・令和6年度に調査を隔年または数年間隔の頻度で実施することが提案され、令和7年度より実施されることとなった。
- ・次年度以降、年次計画に基づくモニタリング調査を継続し、調査間隔の妥当性などについて検証して行くことが望ましい。

### 4. 現地研修会または勉強会の開催の継続

- ・今年度の現地研修会では、整備実施箇所において、クロモジなどの有用な夏緑樹が多数伐採されている状況が確認された。
- ・目標とする森を目指して整備を進めていくには、残す樹木と除伐する樹木を明確にする必要がある。また、それらの樹木を見分けられる人材の育成が重要である。
- ・現地研修会は、植物の利活用や、多様な夏緑樹の生育状況を把握するために、多くの植物が開花する春(4~5月頃)や、果実の熟す秋(10月頃)に実施することを提案する。

## ■ 来年度に向けた提案

### 1. 管理作業

- ・シカ柵北エリア全体：照葉樹、植栽由来種、先駆種など、目標植生構成種以外の除伐  
サルマメ自生地：適切な伐採を実施し、半日蔭環境を維持  
ススキ草原：年1回、全ての植物を地際から刈り取り  
年1～2回、切株から再生した萌芽枝の伐採、つる植物の除去、  
必要に応じてネザサの選択的刈り取り
- ・シカ柵南エリア：照葉樹のソヨゴ、ヒサカキなどの除伐の継続

### 2. ススキ草原の追加調査

- ・ススキ草原では、令和8年度に植生調査（多様性植生調査法）の継続が予定されている。
- ・しかし、調査面積は25㎡と限られるため、ススキ草原内のススキクラスの種の出現状況を把握するために、調査範囲を広げて調査することを提案する。

#### ◎A案：植生調査地点の追加

- ・調査面積：5㎡の調査区を5調査区（計25㎡）追加
- ・調査方法：多様性植生調査法に基づく
- ・調査時期：秋季（9月）

#### ◎B案：ススキ草原内の植物相調査の実施

- ・調査面積：ススキ草原 約120㎡
- ・調査方法：上記範囲内を踏査、ススキクラスの種の分布の有無を重点的に調査
- ・調査時期：初夏（6-7月）、秋季（9月）の2回